

失われつつある職人の技術～瓦業～

1. なぜ瓦の注目しているのか（ロストテクノロジーと保存修復事業）

保存修復の過程では、失われた技術があることに直面する。特に、近代建造物の修復では、工業製品が使われていることが多く、修復作業をより難しくしている。



東京駅丸内本屋

平成24年(2012)保存復原工事完了



神奈川県庁舎

平成31年(2019)重要文化財指定

2. 瓦の歴史（概略）

古 代 瓦製造が始まる

明暦3年(1637) 江戸城が完成、明暦の大火

武家を除き、瓦葺きを禁止

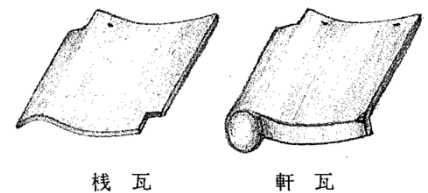
正保2年(1645) 江戸で瓦焼きが始まっていることが確認できる

延宝2年(1674) 棧瓦が発明される

享保5年(1720) 瓦葺の禁令廃止、瓦葺推奨

明治14年(1881) 東京防火令

日本橋・京橋・神田のうち主要道路と運河に防火線を指定。立ち並ぶ建物は屋根を不燃材料で葺かなければならない。既存建物にもこの法令は適用された。

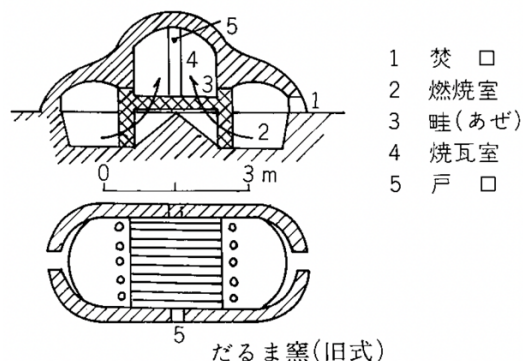


3. 瓦製造の分布と製造方法

三大瓦産地 愛知県「三州」、島根県「石州」、兵庫県「淡路」



だるま窯



だるま窯(旧式)

瓦製造に必要な、土・燃料・水

北足立郡近辺において瓦製造に使う土は、ドロツケなどで使われる荒川河川敷から採取されたものと考えられる。燃料には、大宮台地に植生する松が使われていた。瓦を焼成する過程で窯の内部の圧力を高める必要があることから、だるま窯周囲に水が撒かれることもある。

4. 埼玉の瓦

埼玉県各地で、だるま窯を使った瓦製造が行われていた。埼玉県内の瓦製造の多くは、三州の製造技術が伝播したものであると考えられる。かつて、桶川の五丁台でも瓦生産が行われていた。五丁台のあたりで採取する土の質はよく、地表面より2m程の深さの土を製造に使用したと伝わっている。生産明治後期から県内の瓦製造者は増え続け、生産個数も上昇した。生産された瓦は、河岸場を經由し水運により東京へ出荷された。特に深谷の瓦は、「八幡瓦」として有名であったことがうかがえる。大正期頃には、埼玉県出身の瓦問屋が東京に出現した。



五丁台のだるま窯が描かれた水彩画



本学院の瓦 土葺の屋根



「喜」の刻印